モケグアの日食

秦　茂

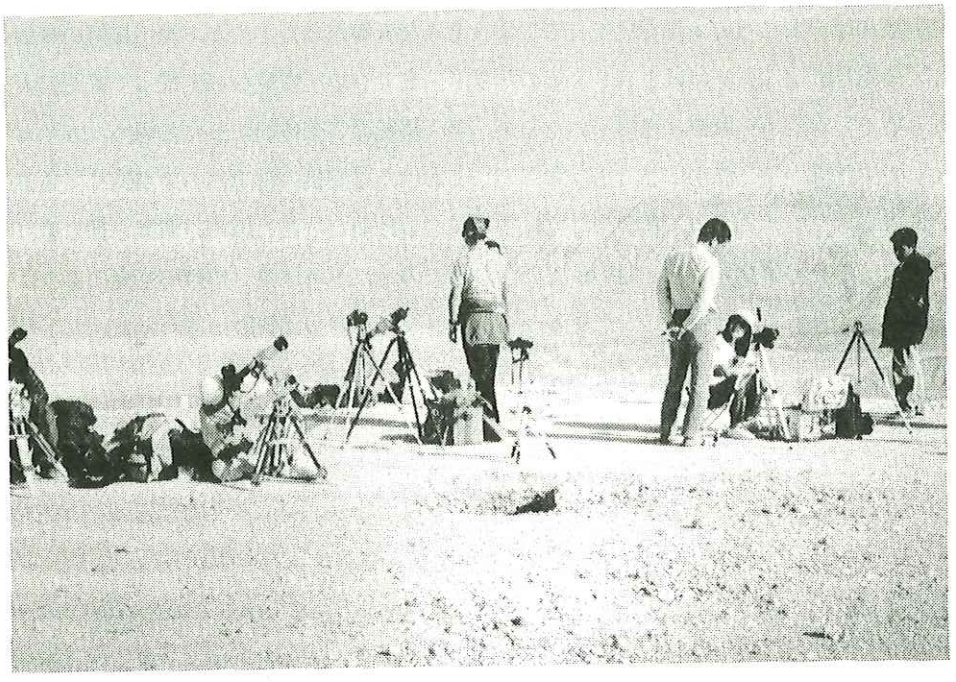
日食友達に出した今年の年賀状では南アメリカの日食には不参加の予定ですと書き送った筈である。それが４月２日の日食説明会、続いて１０月１日に今度の日食についての話をさせられている内に１８回目も参加するかという気になってしまった。１０月１日、１９６８年ソビエト日食以来の関舜衛さんに誘われるままに講演会が終わった後で、旅行社の申し込み書に書き込んでいた。

ペルーには思い出がある。アレキパでお世話になった森崎一義さん（故人）、リマの天野博物館を創立された方として有名な天野芳太郎さん（故人）の思い出につながるペルーに、もう一度訪ねてみたい気持も強かったのである。

１０月３０日の昼前、私達のグループはシンガポール航空でロスアンゼルスに到着した。時差ボケの防止と航空機内での睡眠不足を補うためにロスの市内のホテルで日の高い内に仮眠を取ることになっていたが、昼間はどうせ眠れないので、ロスのダウンタウンに足をのばした。３年前の雨のロスとおなじだ、それにしても東京はせせこましい。深夜にロスを出て、ペルーの首都リマに着いたのは翌３１日の午後である。このツアーは計画の段階で日食の２日前に観測地に到着する取り決めになっていたから、１１月１日には現地入りして、その日の内に望遠鏡が設置出来る場所を決めなければならなかった。昨年１２月に大越さんが現地調査された３ケ所を含めて、もう一つ機材その他の安全の為に警備員を日食期間、常置すると通知されていた４ケ所をバスで回るのは相当な強行軍だと思っていたが、全員の参加ですんなりと、私達が２泊する国営ホテルに隣接する飛行場跡と更に６００メートルほど登ったパンパ・デ・サントニオと呼ばれる丘の上の２ケ所が決定した。ホテルの標高が１４００メートルあり、大越さんが朝方の観測なので標高の低い場所での霧の発生を恐れて、この地を選ばれたのだろうと納得していた。

日食前日、予定通りに観測のリハーサルに入ったのだが、飛行場跡では第一接触を過ぎて霧の高さが高くなり二度、三度と太陽を覆う状況になった。バス会社の社長さんの御好意で大久保さんと私は車に乗せていただき丘の上に急行した。パンパ・デ・サントニオでは心配した風もなく飛行場跡を覆っていた霧も丘の遙か下の方にあるのを見届けて、全員の観測地を丘の上と決定した。

日食当日、望遠鏡のセッティングのための人と南半球の星空を見たい人達はホテルを午前２時半に出発していった。この日の１時頃ホテルから離れた天頂ではオリオンとシリウスが輝いて見えていたが低空では町の灯のためか星の光が色あせて見えた。遅れて出かけて行った丘の



観測風景

上は前日の快晴とは打って変わって薄雲に覆われていた。フイルターを通して太陽を追って行くと時時、雲の厚いところで太陽を見失ってしまうそんな天候だった。やがて第二接触の時刻が迫ってくる私達のグループには１９９１年のハワイ日食でコロナを見ないで帰って来た何人かがいた。きっと今回も失敗だと諦めていたのだ。第二接触の３分位前だったと思う、ガヤガヤとしていた見物席が急に静かになった。お願いしておいた添乗員の秒読みの声が遠くにいる私の耳にもはっきりときこえる。私の時計では予報値の３秒前だったと思う、薄雲を押し退けるようにコロナがその姿を見せた。期待していなかったので、それは第三接触の生光のように力強く明るく感じられた。雲ににじんだダイヤモンドリングを残して皆既は終わった。

ハワイ組が興奮で震えていたように私には見えた。しかし日食時の空には明るい惑星が二つ見えていただけだし、双眼鏡で見た微細構造はインドネシア日食のそれにはとても及ばなかったけれど、とにかくコロナが見えたことはモケグアの神様の最大の贈物だった。

殆どコロナが現れる見込みがなくなった皆既の１０分位前だったと思う、突然「私脱いじゃう」と立ちあがった女性が一枚二枚とＴシャツだけになったが、それはニフティサーブのデザインによる日食シャツだった。胸に大きく日食貧乏と書かれていた。この御利益があったのかもしれない。

日食貧乏

４時間以上もコレクティボに揺られて全員アレキパのホテルに引き揚げた。一日帰国の早い私達５名はアレキパに一泊した翌日、本隊と別れてリマに向かった。
リマではパチャカマ遺跡、天野博物館それに中央寺院、サンフランシスコ教会とその地下のカタコンベを見物した。説明を聞いている中に２８年前のリマの思い出と重なって懐かしさがこみ上げて来た。翌日はナスカの地上絵を小型機の超低空飛行で見物してマイアミ経由で帰国した。

モケグアには予期しなかったアメリカ隊が同じ丘の上で観測していたが、更に南のタクナにはシンクロニシティ・ジャパンという日本人２０名、アメリカ人１５名のグループを含めて、翌日のペルーの新聞によると日本から３８人、アメリカその他の国々から１５００人がタクナに集まったと報じられていた。
天野博物館で平たい陶磁器を見せていただいた。チム文化の８００年から１０００年の時代の物だという。表には部分食の彫刻が刻まれていて、裏は黒い太陽の彫刻である。この時代にペルーを通った日食があれば教えて欲しいと言われる。また宿題が増えてしまった。

パチャカマ遺跡